



健康の輪



編集●全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局(結核予防会普及課内) 題字●初代会長 廣瀬勝代 カット●佐藤奈津江

2008年度カンボジア結核対策スタディーツアーに参加して

長野県結核予防婦人会 伊那市
清水 嘉子

今年度の、スタディーツアーに参加させていただいた。何故参加したのか? 何を観たかったのか? そして何を得ることが出来たのか? 自問自答しながらの、7泊8日の研修旅行だった。



初日: 結核予防会本部にて、結団式が行われた。結核予防婦人会4名、本部9名の参加だ。山下部長より、「何でも見て聞いて体験し、募金が

どのように使われているか確認して、そしてそれらが危険と隣り合わせであることを感じて欲しい」と激が飛ばされたが不安も一杯になった。その後本部内を見学、成田近くのホテルに移動して、夜、懇談会をした。

翌日(2日目): 成田にて中継地・タイ国際空港バンコク行きの出発を待ったが、タイ空港の住民占拠騒動がありこの日は1日空港にて待機となった。

3日目: タイ空港の状況は変わらず予定変更、ベトナム経由での出発となった。さあ長い長い7時間の空

の旅から始まりだ。でも、この間参加者の交流は深まったかな?

4日目: さあ、カンボジア2日目いよいよ研修スタートだ。その前にカンボジアについてレクチャーを…ほんの20年前まではフランスの領土であり、独立後もベトナム戦争による国内の内戦、その後も政局の変動、1975年以降のポル・ポト政権による弾圧・大量虐殺(都市の無人化と呼ばれ、200万人虐殺されたと言われる)と言った悲惨な背景の中、急速に変化を遂げようとしている。現在は安定している。

プノンペン中心街は大きなホテル



が並び、官邸、大使館などもあり、街路樹や下草も美しく整備されクルマニアの白い花が印象的だ。メイン通りはゴミも毎日回収され綺麗だが、通りを外れると途端にゴミは散乱している。赤土の道路もほこりっぼい。高級官僚の邸宅のすぐ横にスラム街があったりして、掘っ立て小屋の密集するなか、ハンモックに寝ている路上生活者も多い。

働かない親が多く、家の周りが汚くても片付けない。特に男性は働かない。男尊女卑の国だそう。学校は2部制で、空いた時間に子どもたちは働き収入をえている。

台風・地震がなく（雨期は洪水がある）雨さえしのげればよい。悲惨な過去を経験しているにもかかわらずのんびりしている。適当に農業（2期作が出来る）をして魚を獲り、木の実を採って売りと言った生活で、勤勉さがなく、道で、川べりで、多くの人が日中でも働いているわけでもなく、ブラブラとたむろしている。又、オートバイも多く、しかも3人、4人乗りで道を埋め尽くすほど走り回っている。ただ走り回っているだけみたい？



川は澱みゴミだらけ。

カンボジア滞在中の注意として、

①生水は飲まない。（日本から大量の水を持参した。）②生ものは食べない。③生野菜・切った果物は食べない。これも危険と背中合わせかな？ CATAの職員の方との食事会で、現地の女性がレストランの並べられた食器をティッシュペーパーで拭いていたのにはびっくり！ ここまでも？といったショックを感じた。

以上でこの国の人々の生活が想像できたでしょうか？ 言葉を飾らないで見たままを書いたが、これは決

してカンボジアの人々を否定したのではなく、触れ合えた人々は皆笑顔の美しい魅力的な人ばかりだった。

滞在2日目（4日目）：見学順からまとめると。

①CENAT（厚生労働省・国立病院機構・結核研究所）を外から見学。

CATA（カンボジア結核予防会）もこの中にある。西山先生からカンボジアの公的結核対策システムの説明を受けた。

②青空集会所での地域ボランティアによる保健教育現場を見学。

ここは、地域公立診療所が併設されている。集会に参加したい人は誰でもウエルカムだそう。JICAを通じ募金で成り立っている。やはり粗末な建物だ。30名位の住民が集まっていて笑顔で歓迎を受けた。ボランティアの女性が結核についての質問をしつつ住民教育をしていた。

「結核について知っていますか？ 遺伝病ですか？ 何故、どのように感染しますか？ 一緒に食事をした場合は？ 予防は？ 感染したら？ 家に患者がいたら？ などの質問がなされ、最後に結核を恐れないうでください。治療できます。そして、この話をほかの皆さんにも話してください」と締め括った。

現在、このようなボランティアの人々が活動を深め、家庭訪問をして結核患者を見つけることもしている。保健師的活動である。双方とも真剣に話し合っていた。特に女性が子供をあやしなながらも元気だ。国としてもこのような住民教育に力を入れている。

③TUOL SLENG(genocide museum) 見学。ポル・ポト時代の刑務所。収監者の惨殺、拷問、顔写真までもが地獄絵図の如く展示されている。

200万人以上の人々が惨殺されている。大きな素焼きの瓶の上で人を逆さ吊りにして、首を切り落としたと言われる現物も展示と言うよりか、無造作においてあり気分が悪かった。このカメに似たものがプノンペン市内いたるところに

あり、見つける度にいやな気分になった。これもこの国の側面である。

④セントラル・マーケット。3坪位の店が、200近くある。生ものから、食品、衣類、宝飾シルクなんでもある。品数が多く、安くて活気がある。



⑤CATA 5周年記念式典。CENATの建物の3階にCATAがある。ほかの国（米・オランダなど）の部屋や、検査室、病棟も併設されている。病棟を見学させていただいた。病棟と言ってもコンクリートの平屋で、入り口も窓もすべて開け放たれ、コンクリートの床に鉄のベッドが置かれているだけで特に医療器具はなかった。外庭と直に繋がり、患者の家族が自由に出入りしている。赤土がまい込み、庭には注射針も落ちていて不安だ。10人ほどの患者が寝ていた。痩せていて具合が悪そう。結核の安定期に入れば是で良いのかも。日本の予防会から用意されたプレゼントが1人ずつ手渡された。ただ、日本の病院をイメージしていた分、胸が詰まった。何か私に出来ることはないか、と強く思った。予防会の寄付した検診車が活用されていて、すごいと思った。式典ではカンボジアの大臣を迎え、CENAT、JICA、WHO、JATA須田さん（一緒に同行された本部部長）の挨拶及びスピーチがされた。同時通訳もあり、この事情に真剣に取り組んでいる様子がわかった。婦人会より1,000ドルの寄付が、参加者の尾上さんより手渡された。

⑥CATA主催夕食会。地元の職員の人との交流。カンボジアに来て

初めての地元の人とのふれあいの場となった。ダンス（輪舞）も一緒に踊り、とても楽しかった。こちらの女性は目が輝いてとてもチャーミング。

5日目（滞在3日目）：シェムリアップへ飛行機で移動。

5日目、6日目はシェムリアップを堪能した。岡田さん（以前CENATに赴任していたご主人と一緒にプノンペンに住んでいた）の助言により多くの場所に案内していただいた。感謝・感謝である。

世界遺産アンコールワット・アンコールトムの遺跡群は本当にすばらしかった。大切に守ってほしい。現在、かなり痛みもひどく、外国資本で復旧作業がなされているが、近い将来公開中止に成るかもしれないそうだ。それにしても日本人観光客の多いこと、土産物屋でもレストランでもほとんど日本人だった。ここシェムリアップでは、農村の生活様式を、トンレサップ湖見学では水上生活者の様子を見ることが出来た。どこも皆貧しい。土地はやせ、牛も痩せている。家はトタン・草・板の粗末な造りだ。水上生活も辛そうだ。しかし、船から船へと飛び回って遊ぶ子供は逞しい。街中では建設中のアパートも多く見られ、この子供たちもいつかは陸上生活者になるだろうか？

又、この地でカンボジア人と共に働いている多くの日本人にも出会えた。



○伝統織物を復活させた、森本喜久男さん。

京都の手書き友禅作家である氏は、此処で工房を構え、桑を、森をそして蚕を育て絹を織る。現地の人から教わり、そしてまた教え、この人の生活が成り立つように人も育

てている。

○土産物 アンコールクッキーを作った、サチコさん。

日持ちの良いものをと考えた。直売所では、現地人と共に多くの日本人が働いていた。

○職業訓練校（展示即売所も併設）

民芸品から芸術品まで作る訓練所。独立もOK。日本人スタッフが働いている。まだまだ多くの日本人が頑張っている。勿論CATAの職員もそうだろう。それは自分のため？ ボランティア？ それもあるだろうが、常に貧困を念頭に置いたこの地の抱える問題にただ向かい頑張っているのだと思う。先送りに出来ないこと、人それぞれ違うと思うが、その行動力と若さが羨ましい。

7日目：最後の訪問地アンコール小児病院を見学した。予防会からのお土産を持参して訪問した。ここでも日本人ナース、赤尾さんの頑張っている姿があった。

この病院の運営はすべて寄付金で賄っている。空港・ホテル・レストランいたるところに募金箱が見られた。1日300～400人の患者が来る。医師も看護師もボランティアによって支えられていて、年1,500名ほど医療従事者が研修に来る。患者は治療代500リエル（日本円15円）のみの負担で診てもらえる。しかし、500リエルが出せない、病院までの交通費がない、そんな家族が多い。農民の夫婦1日働いて500リエル。100ドルあれば一家5人数ヶ月暮らせる。そんな金額だ。そこで、赤尾さん達ナースは地方の村へ訪問看護に出かける。これは地方にスタッフを派遣して、地域住民の健康管理から衛生教育、生活教育（大人教育）をしていくのに大事な役割をしている。しかし地方では、まだまだ伝統的なカンボジア医療（まじないで治療）が浸透しており、最新医学（西洋医学）との板ばさみの中どう考え、変えて行くのが大きな課題となっているようだ。

病院内での高度医療を進めるのと同時に地域に入っただけの訪問看護も不可欠だろう。この病院はカンボジア

にとって真の財産である。

最終のこの日、日本への帰路、ホーチミン空港で見たお月様の美しかったこと。カンボジア料理もおいしかったし、遺跡ももっと見たいしもっと此処に居たくなった。

今回のツアーに参加して多くのものを見聞きし、人と接し、多くを学び、感動をいただいた。伝統と文化・未来、そして貧困も短時間だったけれど感じ取った。この国は長く悲劇の時代を過ごしてきた。外国資本のインフラ先行で戸惑いを感じながらも、過去をバネに少しずつ変わりつつある。特に女性の力を感じた。私自身今この国に両手を差し伸べることは難しいが、この国の文化を重んじ、せめて大きく片手を差し出そうと思う。どんな助けが必要か？

私個人が行うボランティアなど、数多く存在する事実の一つでしかないかもしれないが…しかし、奉仕の気持ちや施しをする慈善活動ではなく、彼らが自ら動ける様な手助け的な支援が必要と思う。今は学習の期間だ。そしてそれは、夢・希望・勇気・創造へと繋がっていくと思う。

それにしても、結核予防会の活動をまじかに見て、日本から遠く離れた外国での援助活動（CATAの活動もふくめ）など、とてもすごいと思う。複十字シール運動も広めなくては！

金額は小さいが、確実に世界中に渡り役に立ててくれている。

そして最後になりますが、今回このツアーに参加でき本当に感謝しています。予防会の皆様、県支部の皆様、CATAの皆様、岡田さん・山本さん（おかげで2倍楽しめました）深くお礼申し上げます。そして、ツアーのお仲間の皆様色々ありがとうございました。



静岡県結核予防婦人会 創立50周年を迎えて

静岡県結核予防婦人会

会長 土屋 貞代

平成20年度、静岡県結核予防婦人会は創立50年の節目を迎えました。



これを記念し、「本会の歴史・現状」と「複十字シール運動」について、役員・会員および関係者の認識を深め交流を図るため、広く一般に本会について紹介し、今後のさらなる発展を図る機会とすることを趣旨に、市内において『複十字シールパネル展』および『静岡県結核予防婦人会創立50周年記念祝賀会』を開催いたしました。

祝賀会は、静岡県厚生部長並びに、(社)全国結核予防婦人団体連絡協議会中畔会長および山下事務局長、(財)結核予防会静

岡県支部常務理事などのご来賓を迎え、会員および関係者約120名の出席を得て、盛会裏に終了することができました。

本会が創立いたしました昭和34年、結核事情は好転のきざしをみせてはありましたが、結核撲滅の手段としてレントゲン車による集団検診の必要性が重要視されていました。当時の初代川野辺会長は、婦人の力を健康管理面に生かしたいと考えており、県からの要請も受け本会が創立するに至りました。その後も、当時総裁の秩父宮妃殿下の御別邸が御殿場にあったことや『結核予防関係婦人団体幹部講習会』が御殿場にて毎年開催されていたことなどもあ

り、妃殿下は本会に対しましてたえず過分のお心配りとお励ましをくださり、会員は結核予防への熱意を高揚させ、活動に邁進することができました。川野辺会長の熱心な指導のもと昭和49年には募金額総額全国1位を達成することもできました。この成果は村松次期会長へも受け継がれ今日に至っております。

本会が創立50周年を迎えることができましたのも会員および関係者各位のおかげと心より感謝申し上げます。半世紀に渡るこの尊い歴史・活動を絶やさぬよう、今後とも本会のあり方を模索しながら、結核予防に邁進していく所存でございます。



千葉県連合婦人会 60周年を迎えて

千葉県連合婦人会

会長 大塚 満子

昨年11月27日、白波立つ九十九里海岸の国民宿舎サンライズ九十九里において千葉連合婦人会創立六十周年をお祝いいたしました。植田浩千葉県副知事をはじめ浜田穂積千葉県議会議長、佐藤健太郎千葉県教育委員会委員長など多数のご来賓をお迎えし、会員250余名が参集いたしました。60年の年月に思いを馳せ改めて先輩諸姉の努力に感謝いたしました。

戦後の荒廃と混迷の続く昭和21年4月から女性に参政権が与えられ、男女平等の民主主義が実現され、それに力を得た先駆的な女性が各地で婦人会を設立し、千葉県では昭和23

年11月に誕生しました。

婦人会は時代の要請に応じながら地域に根ざした活動を展開してきました。台所から消費者運動、環境浄化、子を産み育てる母の思いから青少年の健全育成、交通安全等生活者の視点に立って地道に続けて参りました。

しかし、現在では単一の目標を掲げた女性団体が数多く設立され活発な活動を見せています。価値観の多様化により生き方の選択肢も多くあり、所属する団体も同一地域であるという共通点だけでは繋ぎ止めることはできません。婦人会活動は多方面に亘っていることが強味でも有り弱点であるかもしれません。専門的な知識を要求されると困ってしまいますが、仲間をつくり力を合わせて仕事を果たす

包括的な事柄は得意といえます。ゆるやかな団結、温かみのある地域社会をひとりひとりが構成しています。このように自主的な団体であることで、公正な立場でこそできる明るい選挙推進であり、長い運動が必要な結核予防運動そして北方領土返還要求運動です。

60年を経た今、より一層地域に役立つ婦人会を築いていきたいものです。



ストップ結核パートナーシップ 日本 (STBJ) 1周年を迎えて

ストップ結核パートナーシップ日本
理事 鈴木 幹久

「どこに書いてあるんだ!? いつからやるつもりだ?」いつも平穩冷静なWHO神戸センタークマレサン所長が腰



を上げて驚き、両目を見開いて何度も同じことを聞いた。昨年末、氏を訪ねて神戸を訪れた時のことだ。氏はストップ結核パートナーシップが2000年に誕生した時の初代事務局長であり、STBJの諮問委員も務めてくれていて、いつも素晴らしいアイデアや助言を与えてくれるSTBJ最強の応援者の一人だ。彼が驚いたのは昨夏、STBJが外務省、厚生労働省、国際協力機構、結核予防会と

もに打ち上げたストップ結核ジャパンアクションプランの中に、世界中の結核患者166万人の1割に相当する16万人を救済するという、「10%宣言」が明確に書かれていることを知ったからだ。「できるわけがない! もし本気でやろうというならInnovative(革新的なこと)が必要だよ。それはきっと他にもなく君たちSTBJの仕事になるだろうね」秘策も伝授してくれた。よし、頑張ろう!!

さてInnovativeといえ、ご存じのとおり、新しい結核薬が5年以内に導入される可能性が高い。大変喜ばしい見通しであるが、一方で慎重さを求める専門家も多い。一歩間違えばすべてが台無しになるケースも考えられるからだ。昨今話題の薬の効きづらい多剤耐性結核は薬の使い方を誤ったために出てきたものだが、これは医師や患者の責任と同時

に、WHOの政策に失敗を挙げる声もある。新しい薬が導入される場合には、新たに複数の薬を飲み合わせる標準化学療法を確立しなければならないが、円滑に進められなかった場合には、早々に新薬に耐性を持つ結核が出現しかねない。

新薬開発には大変な時間と費用がかかるが、結核薬の場合には極めて価格が低いいため、製薬企業が独自に開発を進める経済的インセンティブはほとんどない。つまり現在の新薬候補はまさに虎の子ともいふべき貴重な人類の資源であり、グローバル公共財である。新しい標準化学療法の整備についてはWHOに期待が高まるが、一方で最近の新薬開発をリードしてきたアメリカを中心とする新薬開発組織や米当局と、WHOの間で意向が交錯する。

国際的な公共性を優先する政策が実現するよう、注視していきたい。

「手品のじかん」

平成21年度複十字シールのご紹介

昨年は可憐な野の花々でご好評をいただいた複十字シールですが、今年度は再び安野ワールドの住人が帰ってきました。ポケットや帽子から見え隠れする動物たちと一緒に、手品の花々が咲きます。そしてよく見ると、さりげなくいろいろな仕掛けがしてあるところも安野ワールドの面

目躍如たるところ。あなたはいくつ見つけられるでしょう。おいしいお菓子とお茶をそばに、しばし「手品のじかん」をお楽しみください。

種類は今年も大型24面・小型6面の2種、いずれもタックシールです。また今年度は当会創立70周年として、大型シールの中に特別な2枚を入れ

ました。これも安野光雅先生、入魂のデザインです。

今年度も皆さんのお手元に、美しく楽しいシールをお届けし、世界中の人たちの健康に寄与できるよう願っております。



シール原画

平成20年度地区別講習会

東北地区

山形県結核成人病予防婦人団体連絡協議会
会長 丹 スワ子

小春日和と言うには少し遅い季節かもしれませんが、そんな言葉を思い浮かべる晴天に恵まれた暖かい一日でした。天候にも後押しされ開催されました平成20年度東北地区結核予防婦人団体幹部研修会、東北各県はもちろんです、県内も全地域からの参加をいただきました。



高野せきね外科眼科クリニック院長の関根智久先生の講演「乳がんを知る～その早期発見のために～」では、乳がんは国内では20人に一人と罹患率が増加している。早期発見・早期治療は死亡率低下の第一歩。検診率上位の山形県でさえ30%程度、



検診率をあげることが大事、乳がんに関する実態を知り、早期発見・撲滅に役立てる先兵になってほしい等のお話がありました。

続きまして、「結核を減らすためにできる婦人団体の役割」・「生活習慣病を予防するためにできる婦人団体の役割」の2つのテーマによるシンポジウムが行われました。結核予防会結核研究所の小林部長の司会、助言者には、当県最上保健所所長の井淵安雄先生からご協力いただき、各県地域でご活躍中の代表6名の皆さまから地元での活動を交え発表をいただきました。2時間に及ぶシンポジウムでしたが、それぞれの地域で、他団体とも連携して地元に着した有意義な活動がなされており、私たちも同調し、実行へと繋いで行きたいと思います。「自分の健康は自分で守る」ことは大変大切ですが、もう一つ「家族の健康を守る」こともとても大切です。全ての病気は、早期発見・早期治療です。情報を提供しながら「検診」の輪を広げて行こうと気持ちを新たにしたいところです。助言者の井淵先生の総評の中に、人と人の付き合いを訓練することが大切。お手伝いとは、「文化を手づたえ」で教えること（伝えていくこと）、二つのことが特に印象に残りました。

記念講演の「最上義光と直江兼続」は、21年のNHKの大河ドラマで放映されることもあり、大変興味深いようでした。上山市立図書館館長の片桐繁雄先生の豊かな表現力に会場全体が引き込まれ、楽しい時間が流れたように感じました。

そろそろ還暦の声を聞くこの頃、私にとっても「健康」は最も大きな課題です。「ピンピンコロリ」この言葉をご存知の方も多いと思います。生涯現役を目指し、このようであれば願っております。

最後になりましたが、ご参加をいただきました皆様、大変お世話になりました事務局の皆さまに、心より感謝申し上げます。

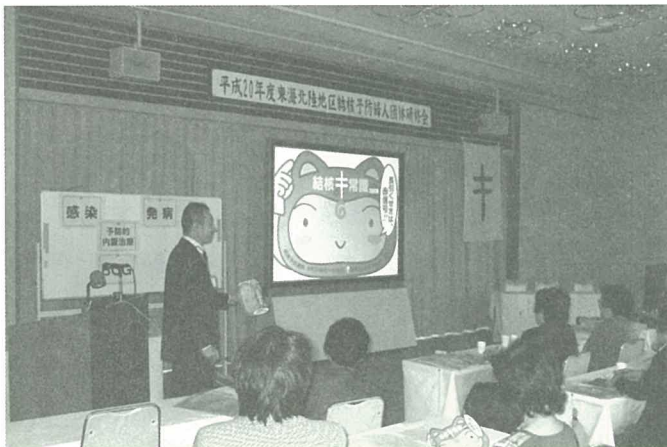
東海北陸地区

三重県結核予防婦人会
会長 大川 妙子

東海北陸地区結核予防婦人団体幹部研修会が平成20年11月13日、14日の二日間にわたり三重県鳥羽市「戸田家」で開催され、七県から総勢53名の参加者がありました。



第一日目は、結核予防会結核研究所放射線学科長星野豊先生のご講演



でした。結核の常識に基づいて日本の現状、世界の現状をわかりやすく詳しく説明いただきました。

引き続きグループに分かれて演習に取り組みました。2つの事例について初発患者の状況、集団感染の経路からそれぞれの場面での問題点等をグループ皆で整理してどうすればよかったのかを考えて発表しました。

先生の質問に考えて発表する時間は皆さん緊張の中相談し合い、明るく答えていました。

先生の微に入り細に入りのご講演は、これまでの経歴に加え話術、そして何よりも人間性に吸い込まれ2時間あまりがあつたと言う間に過ぎ時間が足りない感じがしました。参加いただいた皆さんには結核の知識を深く吸収し、普及啓発の重要性を再認識して頂いた事と確信しました。

二日目は、名高い伊勢神宮参拝とおかげ横町見学コースの視察研修でした。他県の方、同じ三重県でも他婦人会の方とのふれあいも出来て大変意義のある研修会でした。

この研修会に参加して、昭和63年7月26日から29日の4日間、御殿場東山荘で第24回結核予防婦人団体幹部研修会が開催されたことを思い起こしました。当時総裁の秩父宮妃殿下より、「雨ですね。風邪を引かない様にね」のお言葉に感極まったことを記念写真を眺め懐かしく思い出しました。

最後に、我々婦人会は、県知事表敬訪問、複十字シール運動、検診の受診推進等の活動を行っております。近年の少子高齢化、国際化社会の中で、これからも恐ろしい感染症結核の制圧運動を官民一体となり、また他組織との連携を図りながら、ネットワークを広げて根気よく結核ゼロの日を目指して活動していくよう頑張らしましょう。

安心して暮らすためにも…。



九州地区

沖縄県結核予防婦人連絡協議会

会長 大城 節子

第40回九州地区結核予防婦人団体幹部講習会が、平成20年11月6日・7日那覇市パシフィックホテル沖縄で開催されました。一結核の撲滅を計るために、結核予防に関する知識の向上と地域活動の推進、併せて九州地区関係団体の緊密な連携を図る事を目的に開催されました。



○主催に沖縄県、(財)結核予防会沖縄県支部、沖縄県結核予防婦人連絡協議会、(財)結核予防会九州各県支部、

○後援、(財)結核予防会、(社)全国結核予防婦人団体連絡協議会、(社)沖縄県医師会、(財)沖縄県総合保健協会、那覇市

○テーマ「結核予防における婦人の役割」

○参加者、県外参加者40名、県内128名、他

○講演一「結核の基礎知識及び、沖縄における結核の歴史について」

講師 (財)結核予防会沖縄県支部 支部長 大城 盛夫氏

○講演二「結核対策の最近の動向—結核治療を支援する」

講師：沖縄県中央保健所 所長 中曾根 正氏

○講演三「結核予防における婦人の役割と複十字シール運動について」

講師 (財)結核予防会事業部 部長 山下 武子氏

○シンポジウムテーマ「結核予防活動について」

☆ミャンマー結核対策スタディツアーに参加してシンポジスト

宮崎県 谷口 由美繪

☆鹿児島県の結核予防活動についてシンポジスト

鹿児島県 山住 都子

☆結核ゼロをめざしてシンポジスト

沖縄県 下地 正子

○3名の先生方の講演はととても分かりやすく、ためになり活動の示唆を得たと好評でした。

○シンポジウム発表より他に学ぶ大切さ、視察研修の重要性、シール普及へのマスコミへの対応などの大切さ等が提案され、とても有意義でした。

○懇親会は「九州はひとつ」の合い言葉で盛り上がり、次への活動の意欲がみられた講習会でした。



わが婦人会の 自慢の活動

神奈川県地域婦人団体連絡協議会
副会長 石川 寿々子



毎月第一木曜日は、県下各郡市町村の代表が神奈川県婦人会館に参集して、定例会が開催され、県婦連事業・全地婦連・

各種関連事業の検討や報告を行い、各郡市町村婦人会に事業への協力と徹底を図る場となっています。この日は各地域の情報交換の場として、又代表同士の交流や親交の場としても、忙しい中にも有意義な一日です。

毎年恒例となっている「結核予防複十字シール運動キャンペーン」は、これまでに婦人会館の最寄り駅の桜木町駅や横浜中華街・小田原城でお馴染みの小田原駅前等で、一般市民や観光で訪れる方々に結核予防の大切さをアピールする場ともなっています。

一方、各郡市に於いても、地域のイベント（各種まつり・健康フェア・福祉大会・保健センターフェスティバル等）でのキャンペーンや募金活動を行っています。

こうした活動を毎年8月には県知事を表敬訪問して報告すると共に、ご理解とご協力をお願いをすることにより活動への弾みとしています。

今年度の県婦連の活動目標は「地域社会の創造～次世代とともに～」です。この目標に向かって各地域でも取り組みが展開されています。

毎年8月に開催する「平和のつどい」に今年は各郡市から小・中学生と保護者にも参加していただき、講師の子ども頃の戦争体験をとおして、次代を生きる子どもたちへのメッセージと平和の大切さを伝える機会となりました。また毎年2月には県婦連事業の目玉でもある研究発表大会が開催されます。当番市による発表をとおして、地域の現状や地域のめざす目標、県婦連として進む

べき方向性が見えてくる大事な事業になっています。

神奈川県婦連は郡市部や農漁村・山間部と多様な地域を包括する地域柄、地域の特性を活かして活力ある婦人会をめざすと共に、何より会員の健康増進を大切にしていきたいと思っています。



山口県結核予防婦人会
会長 林 タカ枝



山口県に於きましては結核予防婦人会結成以来永年に亘り募金活動を続けてまいりました。この運動の趣旨を理解し、

積極的に参加協力をいただくことの難しさは一つの課題ではありますが、私どもは絶えることなく活動を展開し努力を続けています。

婦人会の恒常的な行事としては、県下全域を対象に、年ごとに地域を指定し「女性の健康教室」を開催いたします。「ガン征圧月刊」に併せて開催する地域もあり効果を挙げています。

「癌の早期発見早期治療」と題して行いました研修会の一例を紹介します。

最初にガンの早期発見により健康な体を取り戻すことが出来た体験発

表をしていただきました。

56歳の女性は毎年行われる検診車で気軽に検診を受け子宮がんが見つかりました。再検査で初期段階と分かり、手術を受け、1か月後に退院となりました。6年を経過した今は何の不安もなく、健康な日々を感謝しながら過ごしているとのこと。

次は奥さんを癌でなくされた男性の発表です。3か月前に亡くされたばかりですから、こうして話して下さる事は大変勇気があることと思いましたが、「お役に立てば」と言われてお話しして下さいました。

発病は8年前で、最初乳癌で手術された時は既に遅かったそうです。病気の内容については一切奥さんには言わないで「これでよくなる」と励まし続けたそうですが、日が経つにつれてあちこちに転移が現れるようになり、ご本人が望まれる薬を飲ませ、退院すると言われれば家で看護したけれど、最後は脊椎を冒され帰らぬ人となりました。今はただ早く受診させればよかったと悔やむ毎日だと話を終えられました。

お二人の発表を聞き、定期的な健康診断の必要を感じ、私どもの活動も更に深めなくてはと強く感じました。

